

海賊の美学

Pirate Aesthetics

ローレンス・リャン | 訳・ドミニク・チェン

Lawrence Liang / trans. Dominick Chen

文化および知識生産の協働的モデルの採用に向かうグローバルな動きは少しずつ地盤を固めてきている。フリーソフトウェア運動に端を発し、芸術と音楽の領域に移行しているこの動きは私たちが持っている作者性と創造行為の観念に対してラディカルな転換を迫っている。本稿での問題提起のひとつは、発展途上国の文脈においてこれらの発展をどのように捉えられるのかという問いである。強固なIP（インターネットプロトコル）法の数々がこうした発展途上国に対してもたらしている負の影響については多くの議論がなされてきた。フリーソフトウェアとクリエイティブ・コモンズ・ライセンスの提示する世界観が、既存の著作権法がもたらす支配的な通念に対して強力なオルタナティヴを提出している一方、他方では日常生活のレヴェルではデジタルとエレクトロニクスの文化は依然としてフリーカルチャーの世界とは関係が薄いように見える。ここではまだ、多様な非法メディアと海賊版コンテンツが日常的に消費されているのだ。

もちろんこれらは2つのまったく異なる領域であるという議論も可能だろう。片方では文化生産の問題が問われていて、他方では政治経済的な問題が横たわっているのだ、と。しかしこの単純な分岐はいまだに固執する幾つかのステレオタイプの再生産に繋がる危険性を孕んでいる。フリーカルチャーと協働生産の世界は、創造性、欲望と主観性の領域で語られがちだし、海賊行為の問題は発展主義と良識の説話に回収されている。換言すれば、フリーソフトウェアとフリーカルチャーの運動を下支える「生産者としての消費者」というような類型的言説は、世界中の海賊行為の現場に注目する時には完全に否定されざるをえないのである。

筆者は、デジタル経済からの排斥やデジタル・デバイドといった議論に拘泥することなく、非合法メディアの流通のなかに見出せる諸々の興味深い発展に注視したいと考えている。デジタルな芸術様式と日常的な海賊行為を区別するのではなく、両者を結びつけることのできる構造的なリンクを探し出してみたい。

この問題を検討するにあたってひとつの示唆となるのは、中国における現代美術シーンに関する次のような主張である。現在、中国のアート業界に対して多大な関心が注がれており、中国について語ることは世界的にも一種の流行となっている。そうして何千人もがアート・スクールに入学しようとしている状況を省みて、ある中国人キュレーターは「タルコフスキー（の映画）が1ドルで買える今、もっと多くのアーティストを生産することは当然のことだろう」と言った。

パブリック・ドメインを擁護する学識者が使用する象徴的な論調のひとつには、既存の作品のうえに新しいコンテンツを創造できることの価値を強調することが挙げられる。彼らはアイデアのパブリック・ドメインを理解するために「インフラ」のメタファを多用する。しかしその発想はしばしばコンテンツとインフラを結ぶ物理的な接続を見落としている。新しいコンテンツの創造を過度に強調することは、次のような問いにつながるだろう。その新しいコンテンツは誰が利用するのか？ そのようなコンテンツと、インフラの民主化の問題はどのような関係にあるのか？

ほとんどの場合において、電子製品やコンピュータの廉価化、商品流通の拡大、コピー技術の偏在化と情報流通基盤の整備といった現象は、フリーソフトウェアやオープンコンテンツといったラディカルで革命的な志向性に起因していない。それらはむしろ、マイクロソフトやハリウッドに